

多くの良き先輩と面識を得て

柳 武

私が長野農試病虫部に就職したのは昭和25年4月である。当時の部長は関谷一郎さんで、私は害虫を担当させられた。この当時長野農試の病虫関係者の顔触れは、主場に害虫担当では関谷一郎、早河廣美、呉羽好三、伊藤喜隆と私。病理担当は大御所の栗林数衛（農林省農事改良実験所長）、市川久雄、原田敏男、寺沢 租、宮川幸重、黒岩 匡、少々遅れて下山守人の面々と、下伊那分場には病理の知久武彦、今村昭二（旧姓 横沢）、害虫の宮下忠博と大勢であった（うち数人はすでに故人となられている）。長野県は正式には鴻巣の関東々山農試がまとめ役のブロックに所属していたが、北陸農試が近隣であったため、諸会議などのお付き合いが多かった。

個人的な話になるが、下伊那分場の宮下忠博さんが、就職直後の昭和24、25年の2回3ヵ月ほど北陸農試で害虫の研修をしており、場長始め関係者に面識があった。たしか昭和29年に結婚され、当時北陸農試の場長であった秋浜浩三さんから「カタメハヨイヨイ」と祝電をいただいたが、意味が理解できなかったという。このことが会議の酒席で話題となり、秋浜場長から「後ろから読めば分かる」と説明があり、そのユーモラスさに一同爆笑したことを記憶している。

北陸病害虫研究会報の第1号は昭和25年1月であり、これは全国的にも最初の試みであったと思う。その後、農林省の病害虫発生予察事業の進展と平行して、地域に病害虫研究会を結成する気運が高まり、関東々山地区で第1号が発刊されたのは昭和29年9月であるから、北陸より4年も遅かったことになる。

北陸農試には杉山章平さん（後に岡山大学に転出）、田村市太郎さん（当時すでに「畑作害虫」という著書を出していた）、とか植物病理では小野小三郎さん（後に昭和38年ごろ関東々山農試に転任されお世話になる）などの大家がおられた。このため、研究会報は単に発表論文をら列するだけでなく、末尾に地域における病害虫の発生概況や農薬のトピックスを掲載するなど編集に工夫が凝らされており、大いに役立ったことを覚えている。

北陸各県の病害虫責任者も粒揃で、しかも任期が長かった人が多い。新潟県の上田勇五さん（農技研の〇〇さんに好意を寄せたが振られた？とか）。富山県の望月正己さん（お酒が入ると陽気になり、地元民謡の越中おわら節を良く歌っておられた）。石川県の川瀬英爾さん（おだやかで学者はだの人柄）。福井県の友永 富さん（まじめで礼儀深い人で、退職後は住友化学工業のお手伝いをされ、広告の裏白紙をメモ帳に度々訪問を受けたこと）等々が、今でも思い出される。

北陸農試に昭和20年代後半から30年代に在籍されて害虫を担当した若手研究者にも思い出がある。岩田俊一さんからはイネカラバエの生態を教わり、長野県内の化性分布調査ができた。後に農技研でもお世話になった。気賀沢和男さんは長野県出身の方であるが、後に昭和34年頃には関東々山農試に転任されて線虫を担当されたが、引続いてお世話になった。また、岸野賢一さんは後に農林水産航空協会に出向されてからお世話になった。大竹昭郎さんには後に農水省果樹試へ転任されたところで大変お世話になった。

長野県から本研究会への投稿は当初多かったが、関東々山病害虫研究会報が発足してから次第に減少した。しかし植物病理関係者の投稿はなぜか遅くまで続いたようである。私は昭和38年、下伊那分場へ転勤になってからは残念ながら全く疎遠となってしまった。

このように、本研究会を通じて面識のあった方々は、当時はもちろん後になっても色々な場面でお世話になった事が思い出され、改めて感謝する次第である。